



對立より社會連帶へ : 關東大震災所感

高島, 佐一郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 35(5):691-710

(Issue Date)

1923-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053601>



對立より社會連帶へ

——關東大震災所感——

高 島 佐 一 郎

一
排し難きアルプとなつて吾人枕頭に迫まる這般の自然現象關東大震災に關かはつて國の内外に充ち溢れた社會連帶の發露をば、破壊的な併し文化現象たる歐洲大戰の犠牲において生まれた國際聯盟現在の無爲無力さに較べ考ふるとき後者の現狀及び之を持ち來した働因は、茲に深甚なる示唆をば、前者完成の條件に向つて與へずしては已まない。是れ此の一文を草した所以である。

が、戰前社會連帶 *solidarité sociale* の思想がしかく遍ねく佛蘭西人心を捉へたのは種々の由來があり、從ふて其が生物學的、道德的、宗教的、法律的、政治的將た經濟的等に適用されるに伴ひ、またレオン・ブウルデ^ヨ又はエミール・デュルケイム^ムと其の提唱者解釋者を異とにするに連れ、其の意義、觀念は必ずしも單一ではない。けれども本文は勿論、其れらを辨別するの必要なく亦た其の餘白をも有たぬのであつ

て、吾人が今之之によつて意味する所は、社會成員の相互扶助による全社會生活の均勢的進化を強調するところの考へ方である。言葉をやや詳しくして云へば社會は其れ自體統一せる有機體なるが故に他の幸凶は悉く其のまゝ己れの慶福不幸たるべしと云ふ命題から出發し、各々は各々の爲めに「chaun le sien」と云ふ箇人主義的な自由主義的な考へを斥け、代ゆるに「各々は全體の爲めに」「chaun pour tous」と云ふ社會連帶的な共同責任的な其れをもつて社會生活の行動原理たらしめる事によつて、總體としてのみならず各箇人的にも、其の生活始めて進化發展すべしとするの思想を指さすのである。また之を吾人の熟知する思潮に相ひ關はらしめて短言するならば、箇々人の本能と云ふ生活原理の根本を無視した共產主義的思潮を拒否すると共に、また箇人の本能に絶對の權威を認むる一派の箇人主義又は自由主義的思想をも排するものであつて、事、經濟生活に現はれては、それは正さしく私有財産及び箇人的自由の原則から派生しきたる諸理論の矯正たるものである。

(ブルヂョア) (Philosophie de la) が、人心は弱く本能は根深い、で、此の觀念の有效に強調せらるべきには、箇々人心の内面生活において克く之を受け容れるべき狀態環境の存在が勢ひ前提となるのであるが、かかる環境こそ今吾人の眼前に横はつてゐ

るのだと自分は思ふ。

二

その災害寸毫も人間自由意思の結果——例へば戦争——によらず却つて暴虐極まりなき自然的必然の結果は、一朝、我が社會的政治的經濟的文化的の中心及び其の近傍を焦土化し、焼失家屋五十萬を算し生命に關かはる傷害十萬を註せる慘害を醸した、まさに言證を絶する所である。右に因る犠牲中には物財の外、人命、物的權利、信用得意、地位等の關係、貴重文獻等より、回復まで停止された文明文化の進みといふものや罹災地以外における損害やにいたる、多岐多端な損害が存するのであるから、其の程度は貨幣價值に見積つて到底正確なるを期し得ない。けれども姑らく、關係自治團體及び國家の負擔部分を二十五億と置き、建造物及び機械商品その他動産の損害を一建築物當り一萬圓と看做すか又は其の火災保險契約總額の二倍と看做すかして計五十億と概算し、其の他の物的權利及び關係等の損害を十億と算當して、損害總額を八十五億圓と計上する事は、少なきに失するとも決して過大なる計數ではあるまい。

（人命被害は主觀的からは勿論、客觀的に言ふても尙ほ金額に表はし得ぬ所ではあるが姑らく西歐における Wm. Perry 以降の慣行に従へ

ば資本化せる其の損害高) 今之を我が國の國民所得及び國富と比較して見ると、近時我が國民所得年額八十億と見積られてゐるから、這般の災害は恰も我が國民所得全體を一舉に葬り去つたものであり、また我が國富をば、彼是尠なからず類似する所から假りに十年前の獨逸總國富千七百億圓(米國國勢調查局の報告に據る。)に匹敵するものと看做すならば、此の震災は實に我が國富又は資本總額の二十分の一を滅却したものである。但し世上、今次の損害をば、例へば日露戰費十五億圓又は歐洲大戰直接費用四千億圓と云ふが如き戰費と比較し、其の數倍又は數十分の一に相ひ當ると稱するものなきを保せぬけれども、併し這般の財貨滅却は何んらの形式においても變形殘存するものがないのであるから、かかる戰費等との比較は全く謂はれなきものである。で、かく吾人は國民所得の全部又は國富の尠なからざる部分を既に完全に焦土に歸せしめた、だから、わが經濟生活と云ふものの直接目的が假りに物的所有の増加又は國富の増進といふ事に在りとしたなら、唯だ其れを大正十二年九月一日前における程度に回復せしむるだけにすら、吾人將來の經濟生活には、一方消費における節約が講せらるべきと共に、他方生産においては歐洲戰後ロイド・チーデが疾呼したがやうに、「一にも生産、二にも生産」が標語たらしめられねばならぬ。

勿論當面の復舊費としては私人自治團體及び國家は尙ほ雄大なる國富の巨大部分には損傷はないのであるから、各々負債を起し社債市債國債を募つて之が資源たらしむるを得るであらうし、更に國家の場合にあつては増税及び新税例へば其の適當なものととして巨大所得に對する所得税率を一層累進的ならしめ、又たかの北、中歐諸國にありては寧ろ不成功なりしも輒近英國にては既に實際問題化されつつある所の資本税を賦課する事も可能であらう、殊に資本課税に至つては素と巨額の公債利拂による將來的負擔に代位するものとして創唱せられたものであつて、それが獨逸にあつて所期の効果を擧げ得ざりし所以のものは唯だ其の貨幣價值における激變ありし爲めに外ならなかつたものであるから、今日の非常狀態の下にありては之が實施は必ずしも妥當ならざるものではないと思はれる。

(資本税に對する英國輿論の賛否 *Dalton, The Financial Situation, Contemporary Review, May, 1923.*) ただ、(の根據については左の二文參照 *Nord, Financial Situation and the Capital Levy, Do. July, 1923.*) かかる一小文において資本課税の問題等に觸れた事をもつて、全然場所外れの脱線なりと非議せらるる向きなくはないであらうけれども、是れ實は後出連帶主義の發露として、課税率の過重ならざる限り、その實際的效果よりも此の際寧ろ精神的刺戟の一材料たるであらうと信ずるに出たものである。併しながら負債と云ひ

又た新税と申せ、それらは畢竟するに將來償還さるべき負債又は準負債勘定であつて決して資産勘定ではないのであるから、國富回復といふ觀點よりすれば、喪失されたる此の巨億の資がその途積極的に嫁ぎ出されざる限り、以前の經濟的地位には立ち戻る事を得ぬと云ふの理義に至つては、彼是異なる所はない。

三

大災害復興の費用如何に巨額に上げられ、東京及び横濱は經濟都市としてだけでも經濟的、地理的諸條件を充分具備してゐるものであるから、其の復舊費に關して一時縱ひ國家殊に關西地方に對し巨大なる負債勘定を帯びるとも他日自力もて之を立派に償還し得べきであり、而かも此の二大都市が一旦眞に文明都市建設に向つての有意識的目的が達せられた暁には、之に吹き込まれた新生命、氣魄及び實力はおのづから他都市他地方に對する刺戟の大源泉たるべく、更に國際的認識をも高むるべきである。かくて是等罹災地をして斷じて、史に傳へらるる北海ハングザ都市の雄なりしヴィネタ又はボンベイたらしめるべきでなく、また然らざらんとしてゐる事は明白である。否な却つて此の復興又は改善と云ふ事業に對して

國民的緊張さを加ふる事ともならば、慘烈なる今次の犠牲は必ずしも決して將來の收穫なしに拂はれたものではない。

併しながら斯かる事共は今より力調せんとする所ではなく、這般災害の吾人に實示した一大事實、即ち罹災地の内外及び國の内外に磅礴した偉大なる社會連帶の發現と云ふの大事實をば、此の大犠牲をもつて購ひ得たる最も貴重な收穫とし、其の意義を尋ねんとするものである。非常時に際會して、内外有らゆる人々は平常の對立をかなぐりすてて悉く連帶觀念の紐帶もて堅く氣持ちと利害とを一つに倚縛させた、かくて各藩對立の場合ならば、また最近における近東の國際對立如きの狀勢にあるあらば、自然の暴虐はより加重せられて或ひは餓孚地に充ち、或ひは敵軍我が焦土を重ね蹂躪せる事なきを保障し得ざりし場合を、吾人は唯だ夢このみ見すべすを得たのであつた。

四

最近偶然的に併し本能的に實示された社會連帶の思想及び行動と云ふものが社會生活の改善の上に如何に貴重なるものであるか、若し眞に重要なるものならば

之を偶然の機會において特發せしむる代りに正常的な社會生活原理たらしむるべく果して如何なる用意を施すべきであるか―凡そ斯かる理義を尋ぬる爲め、姑らく平常無事の場合における人事世相を一考してみたい。

人は凡そ自己又は各家族の保存充實をば活動の本能的衝動とし、而して其の生活をロビンソン・クルーソー的にてではなく却つて社會的に營む。此の故に現代の法的秩序は斯かる本能に拘み、原則として經濟上の自己責任を基調とする箇人主義的經濟秩序を法定すると同時に、此の本能を統制し全體としての社會生活を進化せしむる爲め種々な社會的秩序を規定してゐる。けれども、輓近法的進化の方向が愈々益々後者を強調し來つつあるのは、社會的集團の輿論及び運動も其の一原因ではあるけれども、同時に箇人的本能の覆布の後ろに常に嚴存してゐる人間の社會的機能が漸く内面的に覺醒し來れるが故に外ならぬ。で、此の箇人的本能の重く働く所には人間間、集團間には勢ひ利害對立が世相の前面に立つと共に、社會的本能の強調さるる所には對立の否定なる社會的連帶が有力に現はれる。然るに此の二つの魂が互ひに一高一低繰りかへされたる韻律の生活を營み行くうちにも、上述せる如く近時の大勢が社會的本能の漸次的發達に存するのである。

から、社會連帶の思潮亦た從つて其の水準を高かめられ、其處に不斷に進化する所の社會生活が顯現するのである。

今、之を事實に即して説く。苟くも人間活動が物的所有と云ふ範圍内にて、換言すれば經濟生活の上に表現さるとき、先づ其の固有の本能自我はより強く働くが故に、其處には勢ひ對立が現はれる、其れは集團と他集團との間にも亦た或る特殊利害を爭端として現はれるのである。例へば米穀と製造加工品との價格に就いて都市工業労働者は農業者と、雇傭條件に就いて工業労働者中の熟練者は不熟練者と、農業者中の地主は小作人と、企業内における賃銀労働時間其の他の雇傭條件について資本家は労働者と、また此の資本家たる企業家は金利について金融家と、より廣汎なるものにしては、一般物價について生産者は消費者と、また債務者は債権者と、是れらの各々が利害對立の位置に立つが如きである。然り、分業と交換とを基調として成立する國民經濟營利經濟の性質から、又た文明文化の多様さ複雑さから當然生じ來れる是等多數の集團において、概ね生産成果の分配を爭因として斯かる對立の存する事は素と已むを得ざるの數ではあるけれども、其の對立は對立として常に對抗關係を緊張せしめてゐるか。否な若しも然りとするなら

ば、經濟生活は爲めに破壊さるべき筈であるけれども、事の實際においては其の對立の裡ちおのづから妥協——英國議院政治運用における特徴たる實踐的妥協——行はれ、爲めに革命の代りに進化が實現されてゐるのである。例を再び前述せる對立的集團に採るならば、工業労働者と農業者との對立は物價及び關稅政策等により、地主と小作人との對抗は自作農形成の施設により、熟練及び不熟練労働者間の不和は技術練達の機會擴張により、資本家と労働者との溝渠は勞働立法勞働組合賃銀支拂制度社會政策上の諸運用により、また生産者と消費者と及び債務者と債權者との利害衝突は物價及び金利調節によりて、と云ふが如き場合々に適應せる實踐的妥協講せられ破壊に代はる進化が將來せられる。

五

對立と妥協とは管にかく集團對集團の間——之を階級間と呼ぶの失當なるは云ふまでもあるまい——においてのみ見られる許りでなく、國內地域間並びに國民間にも均しく現はれてゐる所である。例へば經濟上の繁榮において又た第三市場の爭奪において、大阪は東京と、神戸は横濱と、また名古屋は大阪と、といふが如き、或

は支那長江における市場を挟んで英、米、日がまた滿洲における利益に對して日、支那が對峙すると云ふが如きである。併しながら斯かる特殊利害における對立の外、是等の對立者がより普遍的なる利益において共同の關係を有する許りではなく、實は此の特殊利害對立其れ自體も其の背面には利害を共同にしてゐる所が寧ろ極めて多いのである。姑らく國際貿易發生の根據に關する英國學者の通説を藉るならば、一見的對立國民間に行はるる交通は、素と絶對的生產費における甲乙あるに因らずして却つて比較的生產費の關係によつて營まれるものであるから、双當事者は外見的對立にも拘らず、事實上其の利益を共同してゐるものに外ならぬ。是れ、タウシグ等米國學者が一層廣き「比較的利益」と命名した所以であつて、對立はおのづから妥協によつて裏付けらるるの理義は即ち明かである。

件んの考察は更に思想上の對立にすら押し擴げ得るのであつて、例へば立憲政治の下に必然發生し來る二政黨なるものの綱領とか、又は個人主義的經濟組織の下における正系的な資本主義的思想に對する社會主義的思潮とかも、之に外ならぬ。而して二政黨の對立的綱領の宣明存するによつて憲政の善き運用と云ふ妥協が生じ來るがやうに、社會組織に關かはる二思想の對立は、共產主義的社會秩序

なるものが人間本能における全き改造を前提せずしては實現不可能なる事の明白なる以上、共產主義的社會改造の理論如何に精巧に組み立てられ、又た其の宣傳如何に雄大を極はむることも、それは所詮、兩思潮の會合點には其の實踐的妥協たる社會政策が有力に施さるるのに過ぎざるべきである。

かくの如くにして、物質的利害においても將た意識形態についても對立の發生し存在するは、人間本能の性質から眺めて當然の所である許りではなく、斯かる對立の存在自體が當來すべき妥協——若干意味の異なるのを容認してより、高調的な語を用ひたれば、綜合——の前提たるべきものであるから、社會進化の動力實に此處に横はると云ひ得る。ただ戒むべきは、對立を其のまま對立として無爲拱手、窮極限まで放置する所なく、寧ろ理想的に之が綜合の進路を拓くを要諦となすのみ、果して然りとするならば、之を爲すの指導的原理は抑々何であるか、自分は今を假りに之を社會連帶の觀念となすに躊躇せぬものである。

六

翻つて考ふるならば、吾人は今、人間對自然と人間對人間との正常關係が、約言す

れば人間が完全に自然を克服したと共に、人間は人間に對し其の實踐的妥協に入り込むに當つて先づ對立してゐると云ふ關係が、全く覆へり了つたといふの一對の非常現象に面接した、而かも其の餘に現はれた結果其のものに就いて見れば、二つの場合とも克く人類と人類との連帶主義を強調するに至つたいふの非常現象に出喰はしてゐる。然らば其れは何であるか。前者は云ふまでもなく平常人類に對して白象の如くに從順に而して菩薩の如くに慈愛の溢れた大自然が其の不規則にのみ揮ふ所の暴力を關東地方の幾百萬に加へた大慘事を意味し、而して後者は久しく歴史傳統及び經濟關係に育くまれた歐洲諸國民の對立が遂に妥協に到達するを得ずして歴史未曾有の慘害を記録させた歐洲大戦争を指さすものである。共に對立は妥協を生まずして各々其の固有の方法により文化的の及び自然的の革命を遂行したのだ。而してまた其の廢墟の跡に、古戰場に萌えてた相互類似せる結果と云つたのは、人間間、集團間、階級間、國內各地域間又は民族間における對立撤廢せられんとし、相互扶助的な全民衆的又は國際的社會連帶の強調された事實を指示するのである。けれども、その連帶主義の實行は、果して二者何づれの場合にも全かりしか。歐洲における社會連帶の大施設が暴露しつつある其の

現狀に鑑みて、今、這般の我が類似現象の經緯を省察せんとする、一にパリサイ人の流れに伍せざらんとする用意の一端に外ならぬ。

思ふに、歐洲大戰の鐵火は曩きに露西亞、奧太利の二國民命を崩壊し去つたのに飽きたらずして、今や其の餘燼をもつて先づ表面からは獨逸民族を、併しながら裏面からは佛蘭西全民衆を焼き盡さんとしてゐる。かく云へば讀者或ひは、假りに一國國力少なくとも經濟力の衰微が其の貨幣の對外價值低落に反映象徴されるものだとし、かの壹圓に付き數千萬馬克の呼ばれる獨逸と、まだ同八弗替へを示してゐる佛蘭西を斯く同列に論下するのを、不條理なりとせられるであらうか。

然らば自分は唯だ、既に數十億の負債を英米に負ふた許りでなく、また更に、到底償還せられべくもあらぬ對獨償金を強徴すべく大軍を南獨に懸け、言はば盜人に追錢流の蒙昧を演出しつつ自國土の生産力を荒廢せしめつつある、軍國佛蘭西の將來こそは、獨逸の其れに劣らず暗憚たらずや、とだけ答へておく。歐洲諸國は、殊に佛、伊、白は、何故に其の謬れる民族的對立、鬭爭的本能の大犠牲において獲得したる國際聯盟の運用によりて其の後の戰禍を脱せんとはせざるか。自から永久平和を大書して創唱し形成したる國際聯盟への參加をば、米國何故に回避するか又た

回避するの權利あるか。獨逸は事實上未だ聯盟圈外に立てるものなるが故に之を搏つ軍國佛蘭西を抑制する事能はずとするも、近く希臘を強迫到らざるなき伊太利の暴狀を、國際聯盟理事會何故に等閑視するか。國際聯盟の無力無爲ここに極まる、然らば其の由來する所は何づれぞ。是れ、最有力なる北米民族未だ尙ほ各自は各自の爲めに、主我的傳統に立て籠れるが爲めと、歐洲諸國自から大慘毒を嘗め來れるも尙ほ民族的自我と本能とに社會的檢束を加へず國際的社會連帶の大義に覺醒せざるとの致す所である。かくして堪ふべからざるの大犧牲もて得たる唯一の大收穫は、今や空名を抱いて朽ちんとし、從ふて國際的連帶の輦きあつて始めて克く庶幾さるべき全體の進運は到底期し得られざらんとしてゐる。

七

今、自分^一は之を、這度の我が非常時に示されたる、全民衆的社會連帶の氣魄と其の一箇月半後の現狀とに移つし見て考へる。顧みれば、歐洲戰時及び戰爭直後において實行せられた歐洲諸國各般の非常政策殊に同經濟政策が、今次我が非常時における其れを教へたるものの寧ろ饒多なるのに驚く。何故とならば、かの支拂猶

豫令といひ、非常徵發令といひ、中央銀行における罹災地手形再割引による損失の政府保障といひ、特殊銀行を通じての小商工業資金融通といひ、小額面公債による民衆的直接募集といひ、凡そ是等の緊急施設は悉く歐洲非常政策において其の見本を發見し得べく、從つて其の類似を比較し得るのであるから。けれども、其の必然的形成の動機を彼是同うせると共に其の缺陷をも共通にする現象として、今之を比較し臆がて他山の石を彼れにおいて見出さんとするものは實に、我が緊急時に示された全民衆的な相互諒解、相互扶助及び私的利益に對する共同的利害の優越的考量等の發露が、かの國際聯盟に對して保有する所の類似に外ならぬ。

わが非常時直後、に當つては箇人は箇人と、集團は集團と、階級は階級と、一思想は他思想と、一地域は他地域と、否な米國及び支那の民衆を初めとして有らゆる國民は我れど、其の各々が平素有つてゐた一切の對立を放擲して和衷協戮し、相ひ扶け相ひ勵まして死をもつて脅かす大自然の狂暴に面接した。箇人的利害又は感情階級的利害又は反感は捨てられ、代ふるに共同的利害又は感情をば凡らゆる人々の胸は宿として振ひ立つた、――勿論、其の中には若干例外はあつたらうけれども。かの殆んど即時に醸出された我が全民衆からの義捐金額五千萬圓を計上し、また

米國の如き其の最小限度壹千萬圓たるべきを宣明したと云ふが如き、凡そ其の社會連帶の感じの如何に高潮したかの一斑を示すものであらねばならぬ。試みに想へ、此の時、國內一の都市又は地方あつて此の災害を對岸の火災視したか。一の思想團體あつて巴里コンミューンの眞似をなしたものがあつたか。平常、排日に狂奔した大なる隣國人は、此の際最も要望された米穀の禁輸と云ふ長き傳統を尙ほ固執したか。而してまた我れを假想敵として其の海軍力を鹽梅してゐた強國は果して何んらかの敵意を表はしたか。はた又た我れに最も急需される其の木材及び鐵材の價格をば其の同じ大國の人々は引上げやうとしたか。其の悉くが、其の正反對に出でたるの「一致せる事實」は周知の所にかかる。これこそ、全體は其の部分よりも大きい、だから共同的又た社會的利害は必然的に階級的利害に優捷する。無批判なる人々よ、人間は克く階級の連帶を否認しながら尙ほ同時に『人類の連帶』を認め得ると云ふ事を、卿等は忘れたのだと、正統派マルキシストの棟梁カウツキーすらも立派に言ひ切つた其の意味が、其處に美はしくも實現されたのでなくて、抑々何んであらう！

八

しかはあれど、かくも熾烈熱誠を極はめたる超階級的、超地域的、はた超民族的なりし、全人類的社會運帶の發現は、其の後或ひは、かの國際聯盟の現状の如く、個人間の、集團間の、異地域間の利害對立の何づくよりともなく侵入し來れる打算、反感誤解等の間隙よりして、今を漸く弱はめられんとしてはゐないか。之は勿論、救恤救護等其の性質上から、當然其の必要の輕減するに連れて、おのづから相互扶助の要從つて感情の漸減し行ける事を指さすものではなく、實に却つて之よりこそ始めて其の緒に就くべきである復興に對する、罹災地以外の否な正確に言へば眞の罹災者以外の人々の覺悟に就いて言ふものである。實に是れこそ、此の連帶觀念の厚薄こそ、遍ねく言はば一有機體としての我が社會全體の精神的組織の強弱さ、鞏さの試金さるべき最も重大なる時期であり機會であらねばならぬ。此の際吾人は、例へば或る人々は最近時近東問題に關かはつて伊國が希國に對したがやうに傳へ聞く昔代の紀文大盡流の所作を模倣せんとはせなかつたか、また今日の佛蘭西が獨逸に對して抱くがやうに、一都市の人々は強大なる他都市の衰亡をもつ

て自家の繁榮に貢獻すべしとの妄想の下に輕舉をせなかつたか、更にまた如何に輕卒なる國政管理者とても當然自治團體の負擔たるべき事業を國費もては支辨すまじきものであるに拘らず性急にも此の種の前提より國債募集又は租稅増徴に非議を挾める人々はなかつたか、と云ふが如き言議に接する事を限りなく物足りなく思ふものである。右に假設した三つの疑團に就いて其の一、二は問題外とし、其の三は實はかなりに廣く行はれてゐる論議なるやに解せらるるけれども、復舊事業の種類による自治團體又は國家の負擔すべき分野の紛更さるべからざるは論なき所であつて、唯だ前者の起債能力殊に信用の眼前き薄弱なる場合、便宜上後者において起債して謂はば保證の地位に立ち之を前者に貸付くるにこそするべきである。併しながら更に想像を驅れば、國家の非常起債額非常に巨大なる場合にあつては、其の利拂及び減債的負擔は可なり苛重なるべきが故に、斯かる起債に代ふるに寧ろ大所得に對するより、鋭き累進的課稅又は英國において大に實味を示しつつある資本稅の考慮と云ふ事すら必ずしも妥當でなくはない旨を重ねて記しておきたく思ふ。

按ずるに國際聯盟の生命なき現狀こそは、聯盟運用の前提たるべき諸國民の社

會連帶觀念の缺如せるに由來するものであつて、而して現状のままに推移するに
おいては、戰禍による慘害を回復のみかは、歐洲民生の慶福は到底期し得られぬ、と
同様に、我が社會生活殊に其の一表現たる經濟生活においては、其の重要部分に缺
陥發生せる場合、他の部分は全力を挙げ宛がら白血球が肉體上の傷害部分に向つ
て急行救援するが如くに全一的に之を補正するの連帶的作用の全からざる限り、
一國民經濟全體は斷じて發展進化し得べきではない。而かも社會連帶の概念に
おいては、箇人的活動は抑制さるる事なく、唯だ其の所有増殖の結果をもつて、必要
あらば、全體の爲めに奉仕すべきである、と云ふにとどまる、箇々人の本能は之を任
意に伸びしめ、唯だ餘りあるものは、其の一部を割いて以つて全體の發展に培へ
而して是れ軀がて與へたる箇々人の利益たるべきであると爲すにとどまる。幸
ひに箇々人の所有本能の胸奥に此の社會連帶觀念の高潮すべきか、社會改造は、制
度の變革によりて行はれず却つて人心内面の革命によつて社會生活にはおのづ
から不斷の進化あるべきであらう。だから、自分は未曾有の大震災における最も
意氣ある收穫をもつて、此の社會連帶主義の特發化をば正常化させ恒久化さする
にありと敢へて主張する。また此の意味において、社會改造の眞諦に關し既に七
十有餘年前、人間生活の改造を力説し更に社會における道德的精神的革命を強調
したヂョンスチュアート・ミルに對し茲に改めて敬意を拂はんと欲する。(大正十二年
十月十七日)